１．た・づ・な

「強い馬づくり」に思うこと

日本ウマ科学会
会　長
上原　伸美

昨年はＪＲＡ日本中央競馬会の創立50周年の年に当たり、いろいろな記念事業が催され、競馬ファンや関係者には大いに盛り上った年でした。その中の一つとしてＪＲＡ競走馬総合研究所と日本ウマ科学会の共催で、公開シンポジウム「競走馬のスポーツ科学－それは競馬に何をもたらしたか、その未来を探る」が東大農学部において行われ、立見が出る程の盛況のうちに実施されました。

これは、近年日本における競走馬の育成・調教にスポーツ科学を取り入れていこうという気運が高まってきた現れと、大変心強く感じたところです。

しかし、ＪＲＡの50年を振り返って見ますと（これは私がＪＲＡに入会し、勤務した期間と重なりますが）競馬サークルは大変めまぐるしい変化を遂げてきました。ＪＲＡの発足当初、競走馬の生産頭数は1,736頭と少なく、競走馬の増産が急務でした。しかし、昭和40年には4,637頭と生産頭数も増えて、量より質の時代へと移って行きます。

日本が高度経済成長を遂げて行く中で、昭和46年に「活馬の自由化」が実施され、種牡馬をはじめ、外国産馬の輸入が盛んになり、昭和50年の生産頭数は、11,647頭と過剰生産へ突入します。

この時期、日本の生産は血統に焦点が絞られていて、血統的にはかなりの水準にきているけれど、“もやし馬”が多く、世界に通用する強い馬には程遠い状態でした。

これらへの対策として、“世界に通用する強い馬づくり”の委員会（馬事振興研究会）が学識経験者を集めて発足し、競馬サークルの各分野にわたり検討され、答申が出されました。

この中で、若馬の育成・調教の重要性が強く提言され、若馬のトレセンへの

入厩が困難になってきた時期と相まって、生産地での育成・調教が盛んになって行きます。

生産・育成に関して、種々の提言が実施される中で、ＪＲＡによって日高に軽種馬育成調教場が開設され、ヨーロッパに近い、色々な調教施設が実現しました。これと併せて、若馬のトレーニング法や、育成技術者の養成等、外国からの技術の導入に努めると共に、その普及にも力が注がれました。

昭和56年、第1回ジャパンカップ競走が開催され、日本の競馬が世界に開かれます。予想されていた事とはいえ、日本馬は惨敗しました。しかし、3年後の第4回ではカツラギエース号が、第5回ではシンボリルドルフ号が連勝し、一矢を報います。その後、平成4年第12回のトウカイテイオー号以後は、日本馬が地元での優位性を生かして連勝が続き、7割近い勝率を上げています。

この事は、日本の競馬関係者が総力を上げて、強い馬づくりのために海外からの技術導入に努めた結果です。強い馬づくりには、時間と金がかかり、一朝一夕では果たせないと言われます。短い期間に世界と肩を並べる事が出来た事は、日本の誇りと思っています。

今後の課題は、これまで海外から導入してきたものに加えて、日本の土地や自然条件に合った、日本独自の強い馬づくり法を作り上げていく事と考えます。その指針となるのが、馬のスポーツ科学だと思います。スポーツ科学は、色々な分野がありますが、トレーニング法を例にしますと、ハートレートV200や血中乳酸値の変化等を見ながら、個体別にその馬に合った色々な調教法を行うことが出来、スポーツ傷害の予防にも役立ち、その馬の能力を最大限に引き出すことが出来ると考えられます。

日本の風土条件に合った個体別調教法が確立され、世界のG1競走で日本産馬が大いに活躍する日の近いことを期待しています。